



本号の編集にあたっては、学内はもとより学外の方々からも多くのご助力をいただきました。写真の使用に関しては、東京大学アルバム編集会をはじめ多くの皆様にご協力いただきました。

編集発行 東京大学広報委員会

- 編集委員 大塚柳太郎  
大学院医学系研究科教授
- 谷口将紀  
大学院法学政治学研究科助教授
- 内野儀  
大学院総合文化研究科助教授
- 鈴木眞理  
大学院教育学研究科助教授
- 仁科博史  
大学院薬学系研究科助教授
- 小森田秋夫  
社会科学研究所教授
- 柳澤幸雄  
大学院新領域創成科学研究科教授
- 及川雅勝  
企画調整官

印刷・製本 印象社

発行日 平成12年3月31日

お問い合わせ先

東京大学総務部総務課広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-3811-3393

FAX 03-3816-3913

E-mail<kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp>

URL<http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>



総合図書館前の一対のクスノキ  
(*Cinnamomum camphora*,  
クスノキ科)

下 総合図書館前の一対のクスノキのうち左手の樹

三四郎池西側のケヤキ並木



医学部本館と薬学部の間  
ケヤキ  
(*Zelkova serrata*, ニレ科)

下 ケヤキの枝ぶり

# キャンパス散歩



散歩人



大場秀章

ふだん何気なく行き交うキャンパス。その豊かな環境に眼を向けると、見過ごしがちな自然に出会う。

## キャンパス樹木園②

ケヤキの枝は弓状にゆるやかに反っている。その樹姿に優美なものを感ずるのは私だけだろうか。枝の分岐の無限に近い変化も見ていて飽きない。とくに冬は枝の細部まで詳細に眺望できる。細部でのかくも多様な分枝にもかわらせず、樹姿が一目でケヤキとわかるのはなぜだろう。

キャンパスに暮らす私が、冬の寒さが緩んできたことを知るのもケヤキをおしてのことが多い。開葉前に冬芽が膨らむのだが、このときケヤキの枝々はうっすらと紫色をおびるからだ。

冬から夏、そして再び冬へと循環する一年の気候変化の中間に春と秋という季節を意識させるのは、温帯地域の植物の振舞いといつてよい。冬に落葉した木々に新葉が展開し、見る見る樹冠が緑に色づいていく。これをあたかも通奏低音のように、いろいろな生き物が活動の息吹を協奏していく。そして、つぎの落葉の季節を迎えるまでキャンパスに四季の移ろいを知らせてくれる。

ところで木には、一年中葉が繁っている常緑樹、一定期間は落葉して過ごす落葉樹がある。落葉樹には、寒冷期に落葉する夏緑樹と

乾燥期に落葉する雨緑樹があるが、本郷キャンパスに見るのは夏緑樹である。ケヤキはもと武蔵野に多い木であつたらしい。その名残りのように、寺社の境内や農家の屋敷林にケヤキの大木を見ることができ、

本郷キャンパスでもつと数多い木はケヤキで、クスノキとイチチョウがそれにつぐ。とくに育徳園の総合図書館側に沿う通り、それに工学部や経済学部以南の開東大震災後に建築された建物の周囲にはケヤキが多い。生長の速いケヤキは、その重厚な建物を凌駕しつしりと葉を繁らせ、蝉などの鳴き声が響き合う夏は林間にいるような気分さえ覚える。

ケヤキがすっかり落葉した冬でも、常緑樹のクスノキの樹冠には青々とした葉が繁る。本郷キャンパスではクスノキは意識的に植樹されたらしい。それというのも、大講堂安田講堂と総合図書館前の広場に左右対をなして植えられているからだ。ケヤキの枝が弓状に反るのに対してクスノキの枝は直状かわずかに湾曲するため、樹姿がケヤキとはだいぶちがう。クスノキも生長の速いことで有名で、古来から建築や彫刻に重用されてきた。夏緑樹の存在とテリケートな季節変化は、緑一色の夏には気づかない冬から早春のキャンパス散歩の楽しみを幾倍にも増してくれ

る。そんな散歩の折、常緑樹と夏緑樹が混ざったキャンパスの植生が東京大学そのものの存在を象徴しているとふつと思つたことがある。温帯は冬に落葉する夏緑樹が発達することを特徴としているが、東アジアだけに照葉樹林という特異な常緑樹林が存在している。夏緑樹のケヤキと常緑樹のクスノキがキャンパスの主要樹になつているのは、偶然而なる業だけではない。

おおは・ひであき(総合研究博物館教授)